

---

# ケアハウス

柚 雨深

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ケアハウス

### 【Nコード】

N0391S

### 【作者名】

柚 雨深

### 【あらすじ】

息子からの同居の誘いを断り、ケアハウスに入る事を決意する老人。

「終の住処だよ」

と、ご老人は助手席で微笑んだ。

「そうですか、健康診断で通るといいですね。息子さんも安心するでしょう」

私は他に、言葉は見つからなかった。

「ナースコールがあつて安心だからね」

と、そのケアハウスを選択した理由と、ご老人の強い決意の気持ち、私は聴いた。

つい先日だった。今の夜警の仕事を二月末で退職し、息子さんの住んでいる大船渡へ行くと、喜んで私に話したご老人。

「息子が冬場に車で二時間も掛けて来るのも大変だから、行こうと思つてさ」

私に嬉しそうに話し、息子さんの心配をし、仕事を辞める経緯を話していたご老人。

そのご老人を私は車の助手席にさせ、ケアハウス入所審査の健康診断に、複雑な気持ちで市内の病院に向かった。

ご老人を初めて見かけたのは仕事の帰り道。

私は以前の仕事を退職し、今は介護支援施設で週二回の夜勤専門で勤務している。

その仕事の帰宅途中、ご老人は杖を突き、時には道で立ち止まりながら歩いていった。

最初は近所のお年寄りが、散歩でもしているぐらいにしか思っていなかった。

職場では殆ど顔を合わせる機会も無く、勤めて一年半以上も、同じ施設の夜警さんとは知らなかったのだ。

勤務先でご老人に目が止まり、あの帰る途中に道を歩いている人

と初めて知った。

ご老人は左半身に障害があり、杖を突いて歩く姿が印象的で、直ぐに分かった。

その後ご老人と私の勤務が同じ日、帰宅途中のご老人に初めて声を掛け、街まで送ったのが三ヶ月前の雪の降る日だった。

それ以来、勤務の日は夜警さんを確認して、ご老人の時は翌朝一緒に帰る様にお誘いしたが、三ヶ月間で一緒に帰れたのは数回だった。

車に乗る度にご老人は、

「本当に助かるよ、ありがとう」

と言つて、車の座席に毎回缶コーヒーをそつと置いて車を降りた。ご老人は車だと十五分の自宅から職場までの距離を、二時間も掛けて通っていた。一旦駅まで出て百円バスを乗り継ぎ、職場の近くのバス停まで来て、そこから不自由な体でゆっくり歩いて通勤していた。そうすると、自宅からは二時間以上も掛かると言う。

私より一時間も前に勤務が終わるが、私が送ると誘つと待っていてくれた。帰り道、ご老人の関東から岩手に来た話、病気で半身に障害が出たのは自分でも信じられなかった話なども、帰途十五分の話題だった。

「酒とタバコが好きだから、それだけ稼げればと働いているんだ」

と言つて、動くのが不自由だが、タバコ賃の為、働いていると話していた。

今年古希のご老人、障害者が障害者の施設で使つて貰つて有りがたいと、笑っていた。

病院には、検査で二度夜勤明けに送った。

またある日、買い物して帰るのだと、開店前のスーパーの前まで送った事もあった。リュックを背負い、その中に買った物を詰めて、その後バスで帰るからと私を帰した。

息子さんから誘われて同居すると決め、仕事を辞めると一月に喜んでいたご老人が、ケアハウスに申し込んだと聞いたのが二月初め、同居の話から二週間しか経っていなかった。

あれ程嬉しそうに私に話をしていたご老人の心変わりは、私には察する事はできなかった。私が息子だったら、やはり同居を望んだ筈と思うし、ご老人の息子さんも、そう言っていたと私に話したのだが……。

しかし、ご老人に悲壮感は全く無かった。

「生活費は年金で全て間に合うし、歩いて十分の所には温泉もあるしね」

私がどんな所ですかと聞くと、施設の様子も説明し、自分は恵まれていると私に話した。

私は聞いて良いか迷ったが、

「どうして息子さんが誘っているのに、一緒に暮らさないのでかと、聞くと静かな声で、

「息子に迷惑、掛けたくないしね」

と、少し笑いながら自分で決めたと話した。そして最後にご老人は、

「俺の終の住処だよ」

と、安心した様に笑って話したのだった。

短期間に人生の大きな決断をしたご老人に、

「そうですね、良かったですね」

と、ご老人の決断に敬意を込めて、心から良かったと、私は返事をするしか無かった。

自分ならどうするか考えたが答えは無く、これからの人生を真剣に考えようと決意した。

健康診断も通過し、ご老人は先月無事希望のケアハウスに入所した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0391s/>

---

ケアハウス

2011年10月6日00時34分発行